

日中関係の三層構造とその矛盾・発展

—日本のA社と中国地方政府・合作社との連携を通して—

高橋 五郎



おはようございます。
私は、愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）所長、高橋五郎と申します。今日は、年度末のお忙しいところ、かつまた、お寒いところ、このように多数お越しいただきまして、心より厚く御礼申し上げます。

川井学長が申しましたように、ICCSが設立されて15年たちました。2002年COEの21世紀プログラムによって、日本における中国研究の唯一の拠点として採択されてから、15年間経ちました。その間、一貫して研究してまいりましたことは、やはり日本と中国、もちろん中国学研究センターですので、中国が当然の研究対象になりますが、とりわけ日本と中国の関係であります。わが大学の前身が中国において生まれて、そして怒涛の1世紀を経て今日に至ったという歴史の一つの積み重ねのもとにおいてなされてきた研究領域でありますので、日本と中国の関係を見ながら、いかにしてこの関係をつづけ、そしてまた発展させていくべきか、これを学術的に検討していこうというのが、本来のねらいであります。

しかしながら、一方に於きましては、ただ、中国をいかにして試みていくかということも大きな柱の一つであり、中国研究の方法の十分な構築、検討なしには、私たちの設定いたしました研究も十分に進まないということであ

ります。これは大変重要な柱でありまして、これを現代中国学の構築という目標のもとで研究を続けてまいりました。15年間経ちましたけれども、いまなお道半ばです。今後もおかつ続けていきたいということでもあります。すぐには完成しませんが、段階的な発展を実現し、次の研究者につなげていきたいというように思っております。

本日は基調講演をいただく莫邦富先生をはじめ、わたしたちの中国における協定校のひとつであります上海外国語大学の兪先生、そしてまた国内からは、中央大学の服部先生、田代先生、桃山学院大学の大島先生や日本福祉大学の原田先生、中部大学の澤先生、また、名古屋外国語大学の川村先生等々多くの専門家の方々にお集まりいただきまして、これまで行ってまいりました研究のひとつの成果を発表したいと思っております。

私たちが今回このようなシンポジウムを開催した趣旨は、「日中関係研究の方法と着地点の模索」であります。2011年以降は、日中関係がいわゆる戦後最悪といわれるような状態にまで悪化するような事態に至っております。このような中において、日中関係論を研究するにあたり、現実を見据えたうえで、研究の在り方を考えていかなければならないということを痛感します。この点について、今日お集まりの先生方の研究成果を踏まえてお話できれば、大変ありがたいと思います。かつまた、今日ご参集の皆様方とともにいろいろと意見交換をさせていただければ幸いです。思っております。

さて、ここに写真が2枚あります。右上は、実は『旅順大虐殺』という本をかかげている旅順の方であります。この方とは、私は8月に、今日一緒に発表する同僚の周星先生と一緒にに会ってまいりました。この方はやはり多くの中国の知識人と同じように、歴史問題が日中関係の大きな壁になっていると考えておられ、旅順大虐殺の歴史的な研究、そしてまた多くのヒアリングをされ、この大きな本にまとめているわけであります。こういう方とお会いして、やはり私たちは中国の方と会い、そしてまたいろいろな情報を交換し、そうした中で問題点を共有していかなければならないと、改めて思った次第であります。

それから、二番目の写真ですが、これは昨年の8月に山西省の榆社県というところへ行き、農村調査をしたときの光景です。この調査は南開大学と人民大学、中国社会科学院、山西大学と共同でおこなった現地調査のひとつです。中国の研究者と一緒に勉強するというのがベースでございます。なぜかと申しますと、異なった考え方を現場を通じてお互いに確認できるということです。一週間ほど日夜共にして、中国の研究者とそうしました。基本的に調査の仕方も違えば、農村に対する見方も私たちとは違います。そしてまた、私たちが普段研究している農村の様々な問題点についての把握の仕方も、あるいは認識の仕方も違います。そうした多様な違いを私たちがどう理解し、共有していくのか、あるいは克服できるのか、こういったところが最大の課題としてあります。

日中関係論研究の方法上の問題があるとするれば、その一つは、日本側は中国を他国として、いわば地域研究の対象として客観的に見ようとする、また中国の先生は、日本を地域研究の一つの対象として、客観的に見ようとする、これは一つの地域研究の方法としては確立されている方法で、これはこれによろし

いと思います。加えて、我々がこれまで取り組んできた一つのスタンスと言うのは、「一緒にやろう」ということです。つまり、客観的な方法ということは大事ですが、お互いに主観として、主体として、お互いに溶け込むこと、現象を共有して、同じ立場で、同じスタンスで、同じ目線で見ていき、そして、その中から、共同の研究の在り方や問題の設定の仕方、あるいは問題の把握をしていく、こういったスタイルも大事だと思います。

下の写真の方南開大学経済研究所の鄧先生です。彼は日本に来たことがありません。しかし日本については、大変大きな関心をもっております。南開大学と私たちは大変深い関係にあるわけですが、鄧先生は、まだ日本に来たことがありません。今度来たいとおっしゃっていますので、一緒に日本の農村調査する予定です。鄧先生とも、一週間寝食をともにして、様々な考えた方を聞くことができました。彼もまた私の考え方を、少しは理解してくれたかもしれません。

そうしたことを通じて、わたしが今日提起したいのは、「日中関係三層構造とその矛盾・発展」ということです。今まで申しましたように、私は文献や統計資料を読み、様々な人の話を聞きますが、それだけではなく、今申しましたように現地での体験、現地での様々な交流を通じて、いかにして、現在の日中を考えるかという方法をとっておりますので、その一端を残された時間でちょっと紹介したいと思います。

私がこれまで考えてきたことは、やはり現地からの発想であります。

具体的な例に、ICCS、日本の大手自動車部品会社、中国の地方政府と村の合作社との連携、合作の成功事例を通して考えた日中関係です。2010年5月から、私は彼らと共同研究を始めました。いわゆる産学連携というスタイルなのですが、ここで私自身も多くの

ことを学びました。そしてまたその体験を通じて、日中関係というのはどうなのだろうと、感じてまいりました。

この研究を通じ、いっそう重要だと思うようになったことは、**日中関係の三層構造論**です。三層とは「**日中関係原型論**」、「**日中関係現状論**」、「**日中関係発展論**」を指しています。

ここにおける研究方法の枠組みを非常に大ざっぱに分けますと、〈日中関係原型論〉、〈日中関係現状論〉、〈日中関係発展論〉の三層構造・三段階論になっています。〈日中関係原型論〉は、最も良好だった国交回復直後の約20数年間を原型とする日中関係論、〈日中関係現状論〉は日中中央政府間関係の対立軸が徐々に鮮明になり、その排除ができない現在までを分析する日中関係論、〈日中関係発展論〉は〈日中関係現状論〉を踏まえ、日中関係の発展を支えている地方・民間関係分析からその普遍性を探り、当面の目標地点に向かうために必要な具体策を研究する日中関係論であり、これらは、合わせると三層構造を持つ。また〈日中関係原型論〉⇒〈日中関係現状論〉⇒〈日中関係発展論〉という時間的三段階性を持っています。

このうち〈日中関係現状論〉について若干の敷衍をしますと、一つは、日本政府と中国政府、中央政府の関係です。現在、日中関係の多くが、日本の政府と中国の中央政府との関係により、ひきずられて大きな影響を受けています。しかし本当にそれだけなのかと言うと、先ほど川井学長も申しましたように、また、今日、莫邦富先生もおっしゃるでしょうが、実はもっと見えないところで、目立たないところで、民間の、あるいは地方政府と日本の自治体との絆の強さがますます厚く、強くなってきており、そして広がっていると

いうことに私は着目したいのです。この会社との共同作業を通じて、私は中国の地方の合作社、あるいは地方の政府、あるいは関わる人たちが、いかに日本との関係を重視しているか、日本との関係をさらに発展させていきたいかと思っているかということ、直に、何度も体験してまいりました。彼らとの体験を通じてこの会社は、今なお中国事業を展開していくことを本社で決めました。そして、従来、新事業を開発する様々な大会社が始めたいわばサイドビジネス、本業ではない仕事をしていこうという分野を多くの会社が始めていましたが、この分野を本格的に部として昇格させていくというところまで来ました。なぜここまで来たかということ、やはり中国の人たちの日本との協力、日本との関係の強さ、中国の地方の政府、合作社、あるいは地方の企業、あるいは地方に住む人々との間にある日本との関係の強い要望、そしてまた、日本側にあるいわば政府関係を越えた、と申しますか、政府関係を脇に置いて、もっと実際の交流をしていかないと、お互いにお互いのためにならないという、そういった意向が非常に強いわけであります。政府の関係は、これはこれで、私たちがどうもできる問題ではありません。しかし二番目の地方政府同士の関係ですとか、あるいは民間企業同士、あるいは民間の私たちの教育者として研究者としての交流は、自由にできる、相当強く深くできる、というところをもっともっと実践的に広めていくべきでなかろうかと思っておるわけです。そして、そうしたふたつはある意味で矛盾するところもありますが、そうした矛盾は世の中の常であります。三つ目として、より二番目の民間交流を発展させることを通じて、さらに次の世代にこの関係を引き継いでもらうこと。三層というのはそういう意味ですが、そうした発展的な考え方を持っていくことが重要ではないかなと思っております。

このような言い方をしますと、おそらく日中関係論の大家から見ますと、「何を言うか」ということになるかもしれませんが、それはそれでよろしいでしょう。わたし自身の見方、考え方にあやまりも偏見も不足の点もたくさんありますが、わたしには疑問があるのです。これはあくまでも実態を通じて、現場を通じて、得た私の感触なのですが、単刀直入に言いますと、今、日本と中国の中央政府間は、何となく私はこの関係が小気味よいと思っ

ているのではないかということでありま

口ではお互いが何とか回復しなければいけないとかいいますが、実はそうなのかなあと。今の戦後最悪といわれる日中関係こそが、政府にとっては、小気味好いのではないか、心地よいのではないか。気さえするのです。

例えば、日本の方から申しますと、日本の現在の内閣は、常にアジアをめぐる国際情勢が変化している、激変している、あれもこれもやりたい、安保法制も変えたい、そしてまた集団的自衛権の実際の運用も考えている。そしてまたテロ等準備罪さえも通していく。あらゆるものがそうした雰囲気の中で行われています。私自身は反対ですが。そして中国に於きましても同様に、南シナ海、あるいは軍備等々の面に於きまして、この関係の小気味よさを体現するような行動が生まれております。おそらく中国の先生方にとっては、私の言い方は大変差し障りのある言い方なのかもしれませんが、私はそのように思っております。現在の日中関係は大きく変化しています。従来の日中関係論は、いかにして日中関係をよくしていくか、という議論であり、例えばそれには「入口論」と言うものがあります。また、早稲田大学の毛里先生を主軸とした「出口論」もあります。そしてまた日本において最初日中関係を良くしていくためにはお互いの門構えを変えて、お互いの出入りがしやすいようにしていかなければな

らないという「出口論」「入口論」、それから「折衷論」、さまざまあります。いずれにしましても、共通しているのは、現在の状況をいかにして変えるかということ尽きます。

これが大事な点である点是否定しません。しかし、いかにして日本と中国がつきあっていくかということでは民間交流に鍵があると思います。

先ほど、名古屋外国語大学の川村先生と話をしていたのですが、今の日中関係は、日本と中国だけの関係ではなく、日本とアメリカ、日本とロシア、中国とアメリカ、中国とロシア等々、国際関係の中で決まってくる、また影響を受けるということが大変強いです。従って日中関係と言うと、二国間関係ではなくて、周辺の国際関係を見ながら、日中関係を見ていかなければなりません。例えば、日本とアメリカの関係がおかしくなればどうなるか、また、中国とアメリカの関係が変われば日中関係はどうなるか、それは非常に外的な影響によって変わりやすい要素がありますから、この辺りについても目を向けておかなければなりません。しかしそうした様々な環境に揺らぐことなく、安定的に付き合っていくのはやはり民間の交流ですので、これをいかにして理論化していくのかということを考えていきたいと思います。

私の専門は、農業経済ですが、農業というのは、現場がなければ何の発想できないところ

です。私は日本全国都道府県すべて回りましたし、中国に於いても残すところ三つの省しかなく、ほとんど行きました。共通しているのは、日本と中国の農業は同じ立場にあるということです。この同じ立場にあるというのは、時間がかかりますので省略いたしますが、日本と中国の農民のおかれた立場は国家を超え、共通の問題、あるいは発展、可能性、様々な局面を持っており、条件的には変わり

ません。ほとんど同じと言っていいと思います。

これは何を意味するかというと、私たちは日中という国境を越え、国家論を超えて、論じ合える部分が農業以外にもたくさんあるということです。そこが中国についての研究者の方々の専門分野が活かされてくる部分のほうです。日中関係における現在の政府間関係にとらわれない、共存、発展をいかにしてなしていくかということを考えていくのが、大事なのではないかと思います。

ぜひ本日は、莫邦富先生をはじめ、ICCSに集まっていたいで研究してきていただいた内外の先生方の非常に重厚な研究成果がここで報告されるはずであります。大変短い話ではありますが、本日のシンポジウムの背景、あるいは趣旨についてご説明させていただきました。どうもありがとうございました。